

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査 報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/4372000>

出版情報 : 2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :

第5章 宇木汲田貝塚出土石器

松尾樹志郎・宮本一夫

1. はじめに

1966年・1984年発掘調査資料の石器は、弥生早期から弥生中期の石器である（図54～61、図版19～20-1）。1984年資料については、出土層位や遺構が判明している。Ⅺ層は江辻SX-1段階、Ⅹ層は夜臼Ⅰ式、Ⅸ層は夜臼Ⅱ式時期の堆積層である。Ⅸ層には江辻SX-1段階や夜臼Ⅰ式段階の石器も含まれている可能性がある。また、Ⅲ層は弥生中期を中心とする遺物を含みながら、須恵器や近世陶磁器が認められる。Ⅲ層には弥生早期・前期の遺物を含むところから、Ⅲ層までの弥生時代に相当すると考えられる石器を、薄片石器や石核を除きほぼすべてを掲載した。出土した石器の集成表は表8で示した。この中で、層位が記載されていないものの大半は、1966（1965）年調査資料と考えられる。



図54 宇木汲田貝塚出土石器（1）

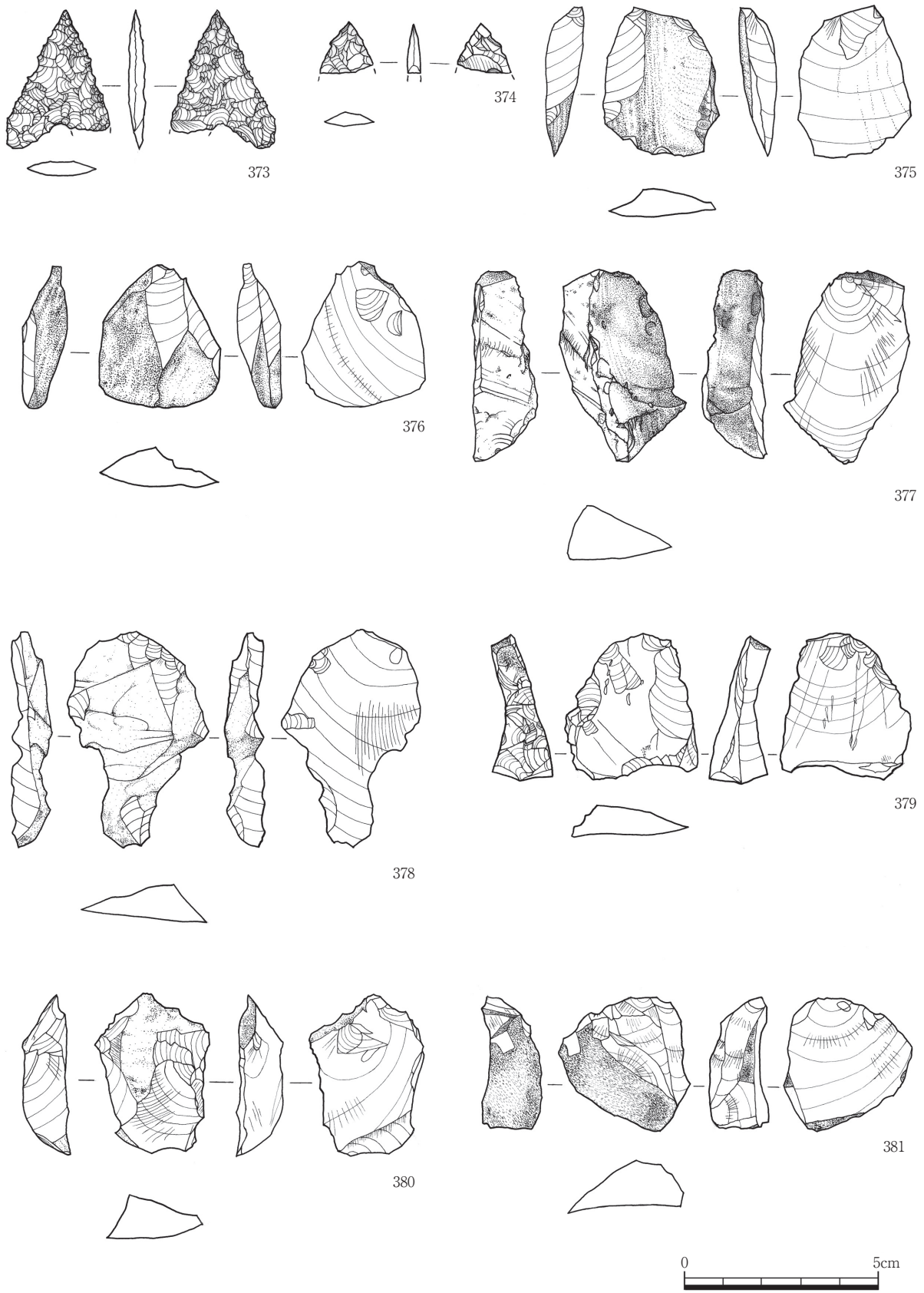


图55 宇木汲田貝塚出土石器（2）

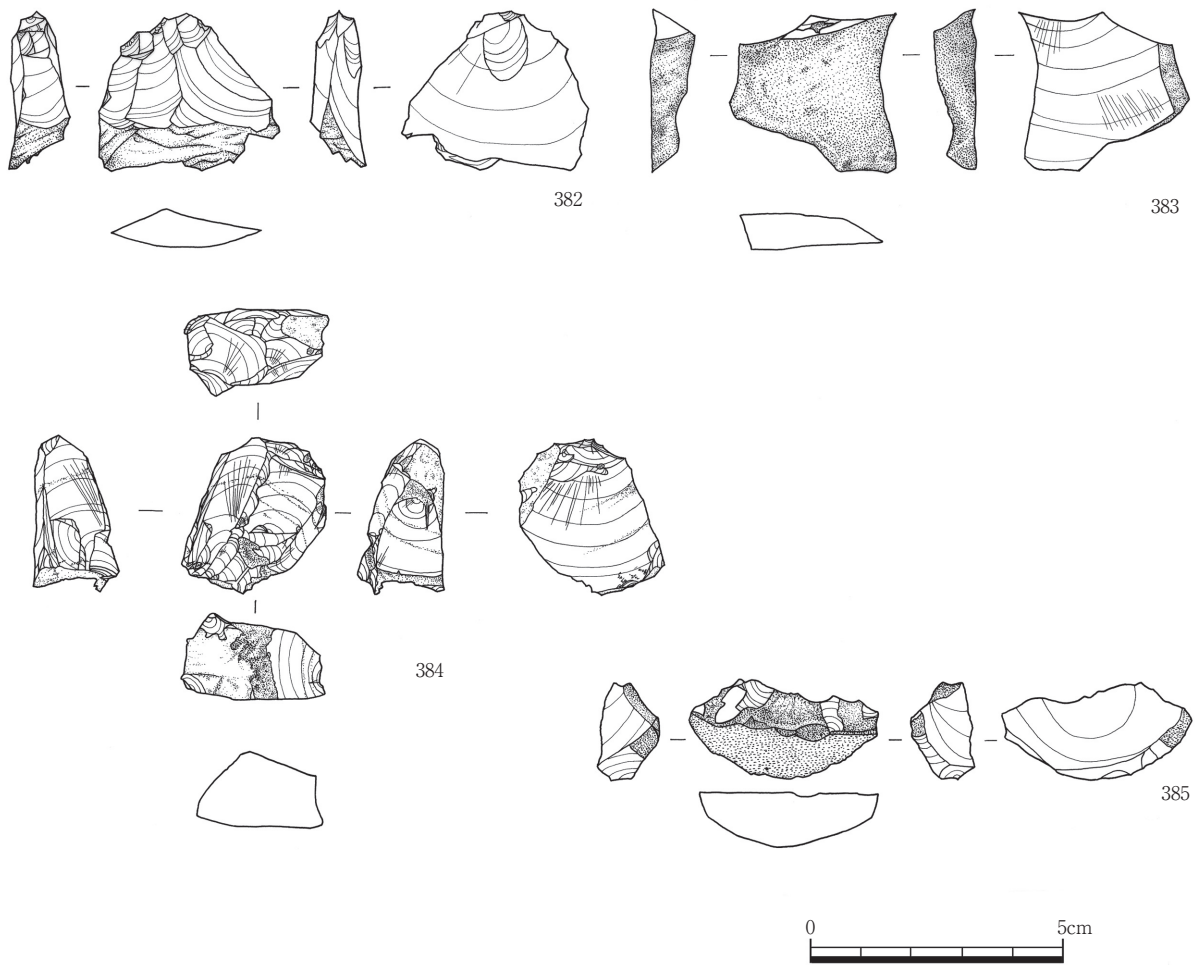


図56 宇木汲田貝塚出土石器（3）

2. 出土石器

363から372はⅧ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層出土である。363は玄武岩製の打製石斧である。短冊形の平面形態を呈し、基部から刃部に向かうにしたがいやや薄くなっている。刃部が摩耗している。364は黒色を呈する頁岩を素材とする両刃石斧である。両主面とも研磨されている。両側面には摩滅が見られ、刃部には刃潰れが認められる。365は頁岩製の磨製石鏃か。上下を欠損しており全形を知り得ないが、基部の破片と考えられる。366は砂岩製の石庖丁か。外湾刃半月形の成品が孔の部分で破損した状態であると考えられる。367は玄武岩製の石庖丁である。両面からの擦切りによって形成された擦切孔の一部が残存している。体部は両面とも丁寧に研磨され、刃部には刃こぼれが見られる。刃部が外湾していることから元は外湾刃半月形であったと考えられる。368は砂岩製の打製石斧である。短冊形の平面形態を呈し、厚さが均等で全体的に扁平である。片面に自然面を残し、粗い剥離によって側縁を作り出している。369・370は凝灰岩を素材とする磨石である。ともに破片資料で全形は不明であり、使用に伴う痕跡も見られない。371・372は安山岩製の不定形刃器である。371は縦長の剥片を素材とし、二次加工により刃部が形成され、一辺にのみ小さな刃こぼれが観察される。372は横刃形で、粗い剥離によって刃部を作り出しているが、刃は鈍い。表面の風化が激しい。

373から381はⅨ・Ⅹ・Ⅺ層出土である。373・374は黒曜石製の打製石鏃である。373は凹基式で片

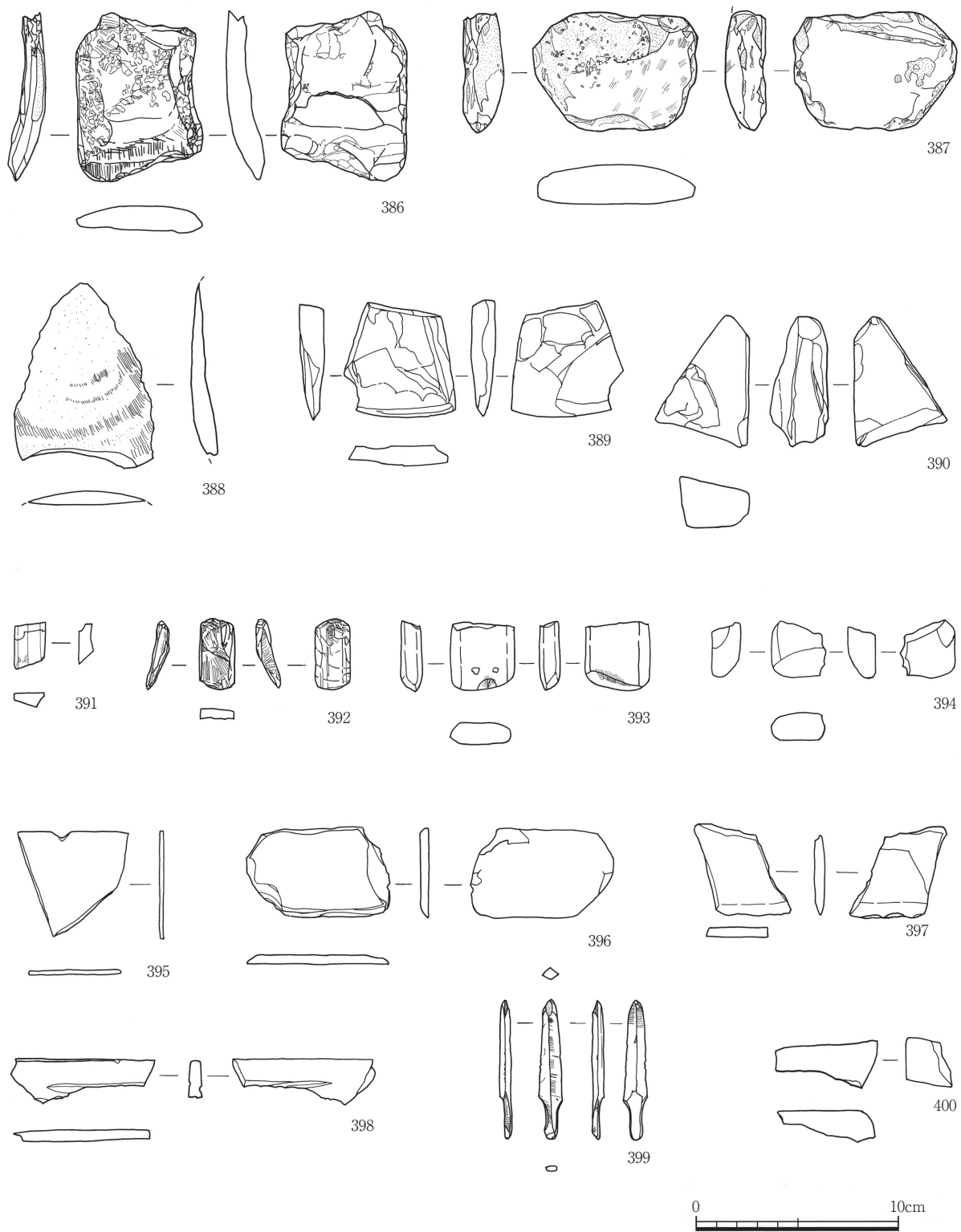


図57 宇木汲田貝塚出土石器（4）

脚端部を欠損している。挟りは深く、表裏両面からの剥離で作られている。調整剥離によって鋸歯状の刃部が形成されている。374は平基式の小型品で、粗い剥離調整が施されている。375から381は黒曜石の剥片である。375は背面に自然面を残し、二次調整の剥離は行われていない。376は背面に

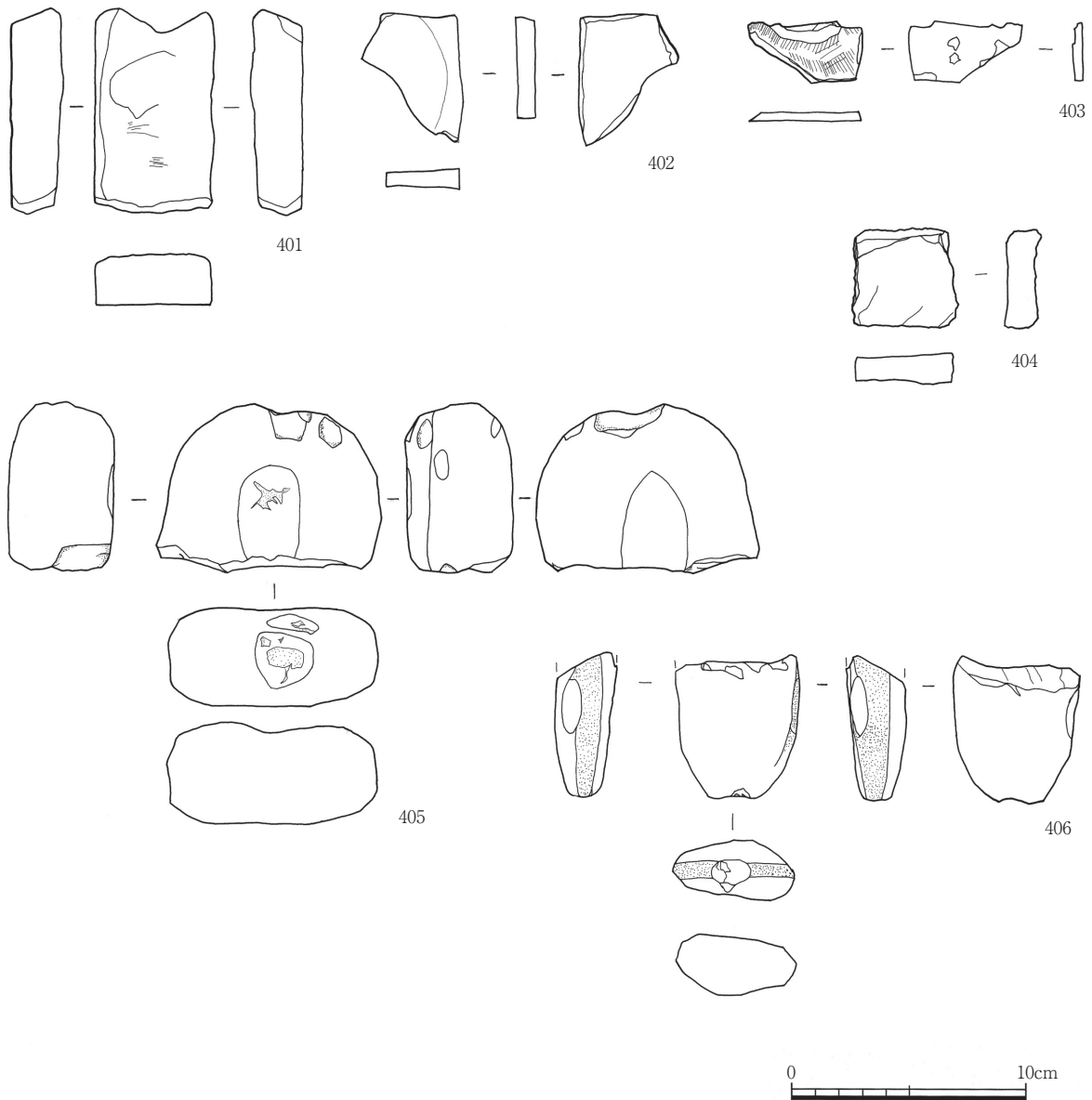


図58 宇木汲田貝塚出土石器（5）

自然面を残しつつもネガティブな剥離面が形成されていること、側縁の一部に調整剥離が見られることから二次加工が施されていることがわかるが、剥片の形状は損なわれていない。377は二次加工が行われておらず主要剥離面以外自然面であるが、左側面のみ質感が異なる。後述する石核（433）同様、研磨されている可能性がある。主要剥離面の上部にバルブが観察される。378は縁辺の数か所に細かい剥離が施されているが、刃は形成されておらず、自然面を大きく残している。379は上面に自然面が残り、表面には数か所に二次加工の痕跡が見られる。表面がやや摩滅している。380は背面に二次加工の大きく粗い剥離が施されているが自然面も残っており、調整剥離は施されていない。381は主要剥離面に数回二次加工の粗い剥離が施されているが、表面に大きく自然面を残している。

382から385はⅨ層出土である。382・383は黒曜石の剥片である。382は381同様に主要剥離面に上面から数回二次加工の粗い剥離が施されているが、一部に自然面を残している。383は二次加工が施されておらず、主要剥離面以外は自然面である。384・385は黒曜石の石核である。384は全体的に粗い

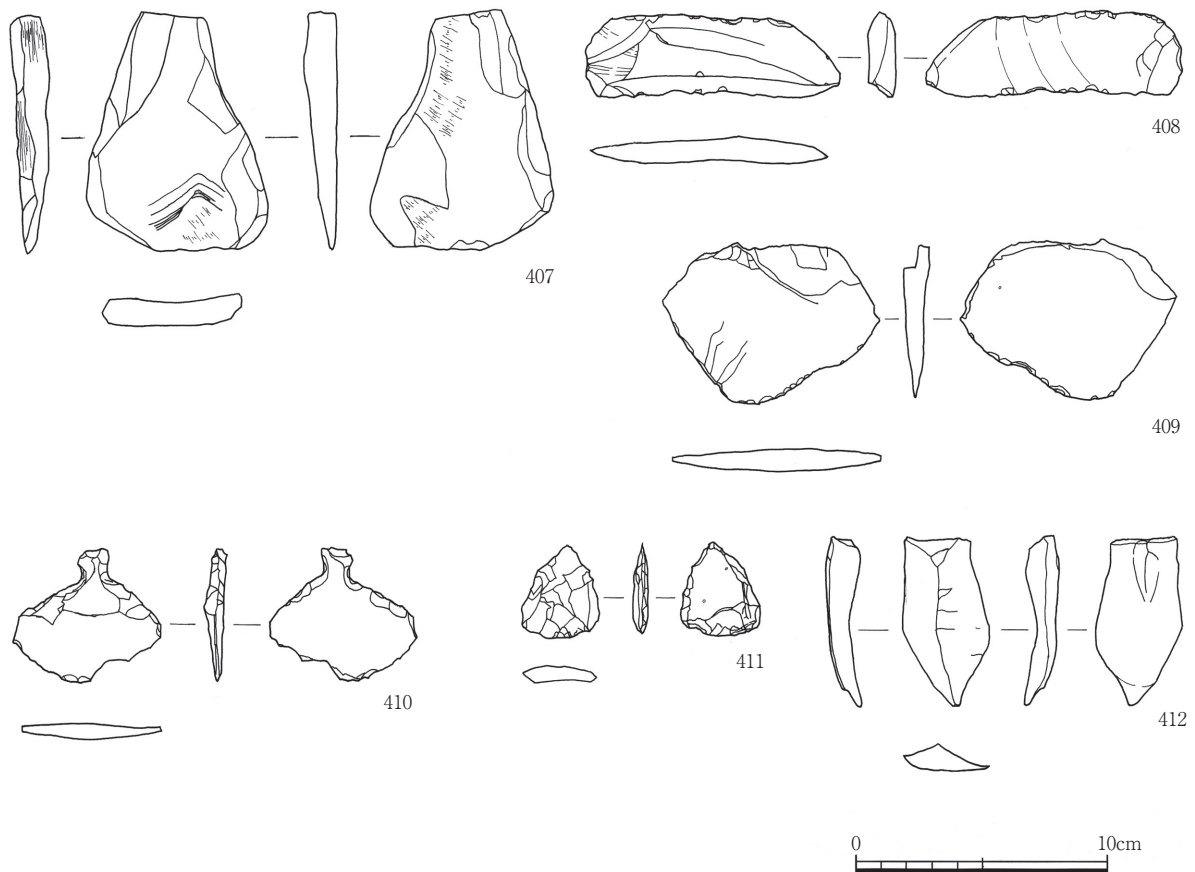


図59 宇木汲田貝塚出土石器（6）

剥離による大きな剥離面が形成されており、上端・下端に自然面を残している。385は背面に自然面を残す。384に比べて長さに対して厚さが大きい。

386から433はⅢ層出土および出土層位不明である。386・387・388は破片資料であるが、形状から両刃の伐採斧であると考えられる。386は砂岩製で、主面の上部に敲打痕、下部に研磨が観察され、裏面は剥離面であることから、刃部付近の破損品である。387は頁岩製で、主面の上部に敲打痕が見られ、それ以外の部分は研磨されており、裏面は剥離面である。386同様、刃部付近の破損品であると考えられる。388は硬砂岩製で、下部に研磨痕、上部に敲打痕が見られる。側縁の一部に二次的な剥離痕が見られることから、石斧の破片を刃器に転用した可能性も考えられる。389は粘板岩製の大型扁平片刃石斧である。平面および横断面形が台形を呈し、後主面はわずかに外湾する。刃部の一部を欠損し、前主面・後主面の一部が薄く剥落しているが、両側縁・基部・刃部は丁寧に研磨されている。390・391は柱状片刃石斧である。390は頁岩製で、基部付近の破片資料と見られるが、挟りの有無は不明である。前主面は丁寧に研磨されており、他の面にはわずかに剥離が見られる。391は小破片であるが、後主面の一部である。392・393・394は扁平片刃石斧である。392は前主面が外湾し、後主面が内湾する縦断面形をとる。391・392は青灰色と黒灰色の互層をなす層灰岩を素材とし、ともに石材の葉理の方向が刃部と直行する縦目取りである。393は黒色を呈する頁岩製で、刃部付近の破片であると考えられるが、刃線は曲線をなし鑄も不明瞭である。両主面、両側面とも丸みを帯びており、横断面形は楕円形に近い隅丸方形を呈する。394は凝灰岩製で、393同様に刃線は丸みを帯びており鑄も不明瞭で、各面の境界の稜線が不明瞭である。

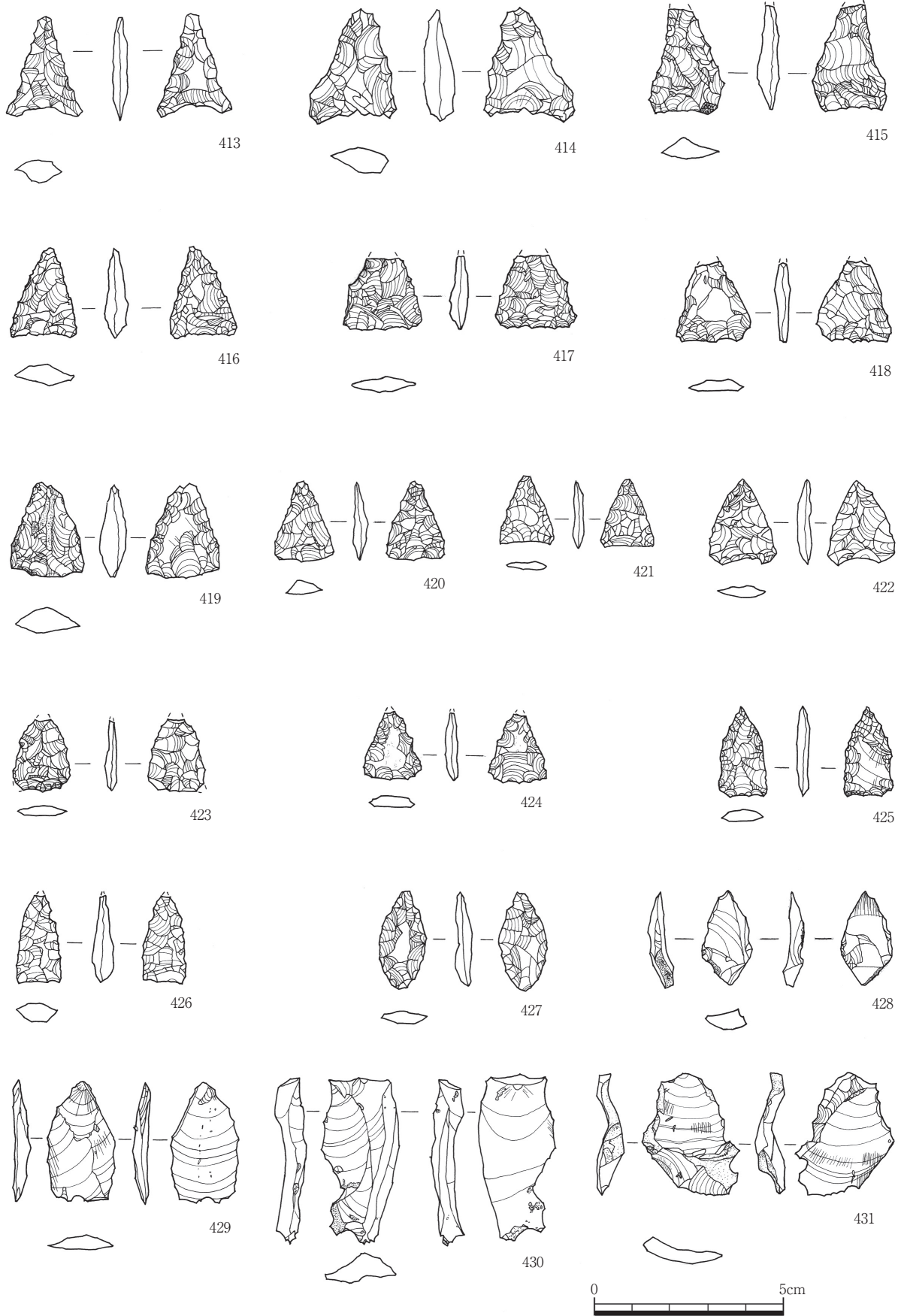


图60 宇木汲田貝塚出土石器（7）

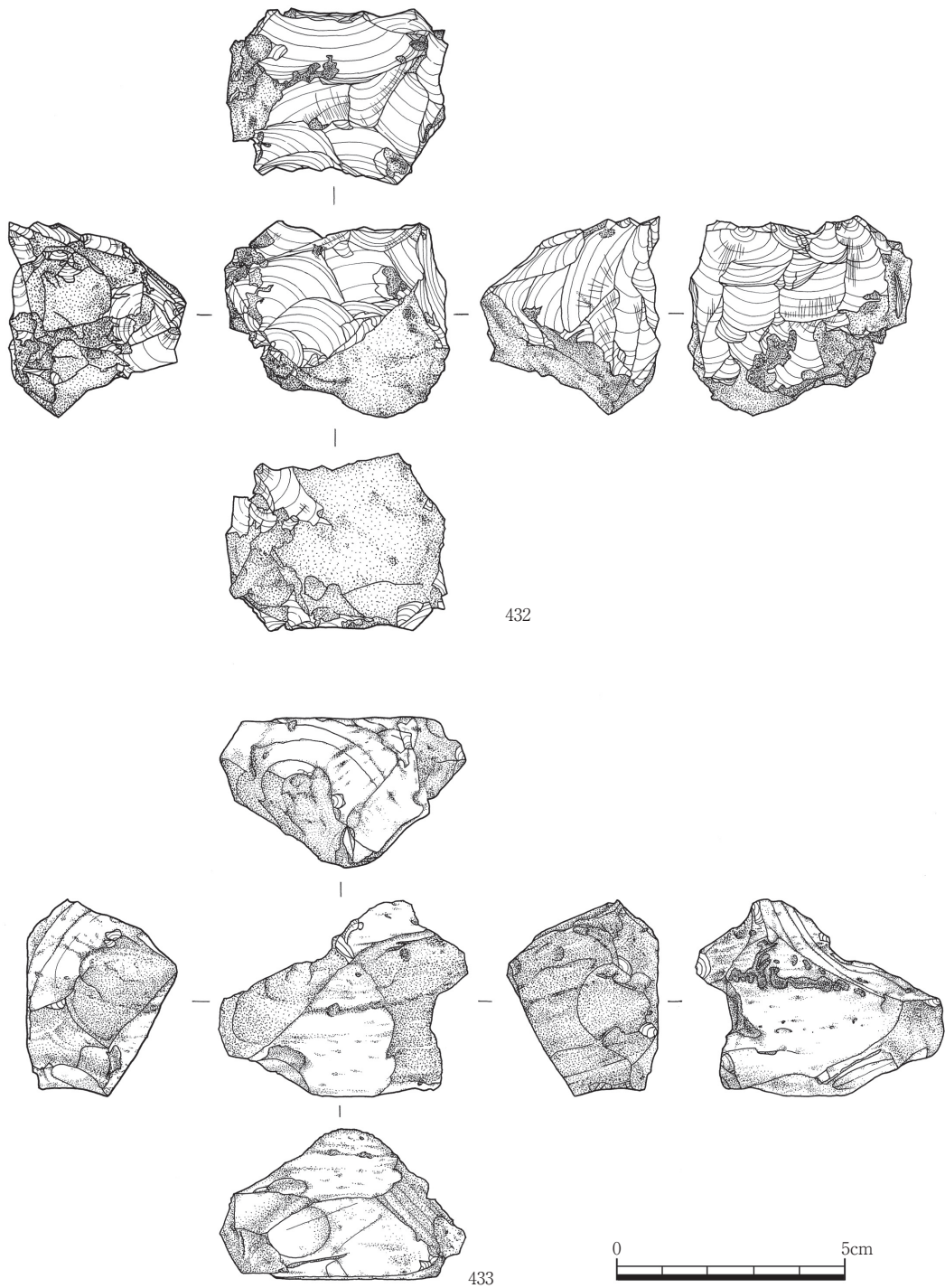


図61 宇木汲田貝塚出土石器（8）

395から398は石庖丁である。395、396、397は堇青石ホルンフェルス素材とする。395は外湾刃半月形の成品が破損したものである。表面の風化と剥落が激しく、非常に薄い。396は体部と刃部の破片であると考えられるが、穿孔や擦切孔は見られず全形は不明である。397は刃部と体部の一部が残存している。刃付けは偏刃両刃で、刃部が緩やかに外湾する。表面の風化が進行しており、一部剥落も確認される。398は玄武岩製で、背部と擦切孔が残存している。背部が直線であることから、元の形態は外湾刃半月形であったと考えられる。表面は丁寧に研磨され、両面からの擦切りによって溝状

表8 宇木汲田貝塚出土石器観察表

番号	器種	地区	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
363	打製石斧	G9	X a	玄武岩	9.1	4.3	1.9	95.2
364	両刃石斧	I5	IX b	頁岩	7.6	4.1	1.6	100.6
365	磨製石鏃	K5	IX b	頁岩	3.2	0.6	0.4	1.5
366	石庖丁	H5	X b	砂岩	4.1	3.1	0.5	9.3
367	石庖丁	J6	IX b	玄武岩	4.5	6.5	0.7	36.7
368	打製石斧	G9	X a	砂岩	8.3	5.2	1.3	97.3
369	磨石	J8	VIII	凝灰岩	3.3	4.9	0.8	12.8
370	磨石	J5	IX b	凝灰岩	6.7	4.3	2.1	67.5
371	不定形刃器	B8	XI	安山岩	9.0	4.9	1.4	64.5
372	不定形刃器	F8	XI	安山岩	6.6	6.6	1.0	69.9
373	打製石鏃	J6	X b	黒曜石	3.6	2.7	0.4	2.2
374	打製石鏃	F8	X a	黒曜石	1.3	1.4	3.2	0.5
375	剥片	G7	IX a	黒曜石	3.9	2.4	0.9	8.6
376	剥片	G9	XI	黒曜石	3.7	3.2	1.1	9.9
377	剥片	B8	IX a	黒曜石	4.9	3.3	1.6	18.5
378	剥片	K6	IX b	黒曜石	5.6	3.6	1.0	12.7
379	剥片	J6	IX b	黒曜石	3.7	3.3	1.6	13.0
380	剥片	J8	IX b	黒曜石	4.1	2.9	1.1	12.5
381	剥片	J7	IX b	黒曜石	3.5	3.3	1.6	14.4
382	剥片	K6	IX b	黒曜石	3.1	3.6	1.0	8.6
383	剥片	J6	IX b	黒曜石	3.1	3.3	0.8	6.4
384	石核	J5	IX b	黒曜石	3.1	2.9	1.7	13.4
385	石核	IJ78	IX b	黒曜石	3.8	1.7	1.1	7.0
386	両刃石斧	J5	III	砂岩	8.3	6.3	1.0	111.7
387	両刃石斧	G8		頁岩	8.1	5.9	2.9	138.9
388	両刃石斧	J78	III	硬砂岩	9.2	5.8	0.9	59.1
389	大型扁平片刃石斧	J5		粘板岩	5.8	5.5	1.1	49.9
390	柱状片刃石斧	J5		頁岩	6.5	4.6	2.8	91.8
391	柱状片刃石斧	G9	III	層灰岩	2.2	0.7	1.6	3.9
392	扁平片刃石斧		III	層灰岩	3.5	1.8	0.5	6.9
393	扁平片刃石斧	J	III	頁岩	3.4	3.1	1.0	22.9
394	扁平片刃石斧	G8	III	凝灰岩	2.8	2.7	1.5	15.5
395	石庖丁	K5	III	堇青石ホルンフェルス	5.4	3.2	0.2	9.8
396	石庖丁			堇青石ホルンフェルス	6.9	4.4	0.4	28.6
397	石庖丁	JK56	III	堇青石ホルンフェルス	4.5	3.7	0.5	13.7
398	石庖丁	K78	III	玄武岩	7.1	2.3	0.6	17.5
399	磨製石鏃			頁岩	6.9	1.0	0.5	5.6
400	不明石器	K78	III	安山岩	5.1	2.3	1.5	26.2
401	砥石			砂岩	8.7	5.1	2.2	176.1
402	砥石			砂岩	5.3	4.1	0.8	22.7
403	砥石			頁岩	4.9	2.6	0.4	5.8
404	砥石			砂岩	4.5	1.3	4.2	43.2
405	凹石		III	凝灰岩	7.0	9.3	4.5	500.0
406	敲石	K6	III	凝灰岩	6.2	5.4	2.5	116.8
407	打製石斧	K5	III	頁岩	9.5	7.3	1.5	94.0
408	不定形刃器	J5		安山岩	10.2	3.4	1.2	47.0
409	不定形刃器			安山岩	8.7	6.3	1.0	64.5
410	石匙			安山岩	5.8	5.2	0.8	16.3
411	打製石鏃	K7	III	頁岩	3.3	3.5	0.5	6.9
412	不定形刃器	G9		安山岩	6.8	3.4	1.3	24.5
413	打製石鏃	K5	III	黒曜石	2.7	2.1	0.7	1.8
414	打製石鏃			黒曜石	3.0	2.3	0.8	3.8
415	打製石鏃		III	黒曜石	2.9	2.0	0.6	1.9
416	打製石鏃			黒曜石	2.3	1.1	0.6	1.8
417	打製石鏃	JK78		黒曜石	1.9	2.1	0.5	1.0
418	打製石鏃			黒曜石	2.2	2.0	0.4	1.6
419	打製石鏃	J6	III	黒曜石	2.6	1.9	0.7	2.5
420	打製石鏃			黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.9
421	打製石鏃			黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.6
422	打製石鏃			黒曜石	2.3	1.7	0.3	1.1
423	打製石鏃	G8	III	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.8
424	打製石鏃			黒曜石	1.8	1.5	0.3	1.0
425	打製石鏃	JK78	III	黒曜石	2.4	1.3	0.3	0.9
426	打製石鏃	G6	III	黒曜石	2.3	1.2	0.5	1.4
427	打製石鏃			黒曜石	2.6	1.3	0.4	1.2
428	打製石鏃		III	黒曜石	2.5	1.4	0.5	1.5
429	打製石鏃	J6	III	黒曜石	3.2	1.8	0.5	1.7
430	剥片			黒曜石	3.4	2.0	0.7	5.5
431	剥片	JK56	III	黒曜石	3.0	2.5	0.7	3.0
432	石核			黒曜石	4.3	5.0	3.9	73.5
433	石核			黒曜石	4.3	5.4	3.3	62.0

の孔を形成している。399は頁岩製の磨製石鏃である。有茎式でほぼ完形であるが、刃部先端および茎の一部が欠損している。長い鏃身は断面菱形で、茎は断面六角形であったと推測されるが、破損後の再加工が甘く断面形は不明瞭である。鏃は鏃身から茎まで直線的に走るがやや丸みを帯びている。関も刃部と直角をなすものではなく鈍角に緩く研ぎ出されており、全体的に鋭さを欠く資料である。400は安山岩の素材に研磨が施されたが石器であるが、器種は不明である。

401から404は砥石である。401は砂岩製で、各側面が明確な稜をなして接するが、それぞれの面は平坦であり砥面は発達していない。402は砂岩製の破片資料で、一面のみ砥面の発達が顕著であり、中心に向かって薄くなっている。他の面は利用されていない。403は頁岩製で、一面のみ利用されており、一定方向の研磨痕が観察される。404は砂岩製で、他の砥石同様に一面のみが利用されている。405は凝灰岩の円礫を利用した凹石の破損品である。主面・裏面の両面に凹部が形成されているほか、側面にもくぼみが形成されている。406は凝灰岩の円礫を素材とする棒状敲石の破片である。両側面に敲打痕が見られ、下部に使用によると見られるくぼみが形成されている。

407は頁岩製の打製石斧である。平面形態は基部が狭く刃部が広い撥形で、厚さは基部が最も厚く刃部に向かうにしたがって薄くなっている。刃部には微細な剥離痕が観察される。408・409は安山岩製の不定形刃器である。408は縦長の剥片を素材とし、二次加工により長辺の一辺に刃部が形成され、鎌状の平面形態を呈する。409は粗い剥離によって体部を成形し、調整剥離によって刃部を作出している。上縁および体部中央が厚く、下縁の刃部に向かうにしたがい薄くなっており、鋭い刃部が形成されている。410は安山岩製の石匙である。刃部のおよそ半分を欠損している。調整剥離によってつまみ・背部・刃部を作出し、体部には剥離面が多く残る。411は頁岩製の打製石鏃である。平基式の平面三角形で、粗い剥離により刃部を形成している。412は安山岩製の剥片石器である。縦長の剥片を素材とし、二次加工も見られるが、刃こぼれなどの痕跡は確認されない。

413から429は黒曜石製の打製石鏃である。413は凹基式の完形品で、抉りは表裏両面からの剥離で形成されている。414は全体的に剥離が粗く、刃部に調整剥離が施されていないことから未成品とみられる。基部に片面から剥離を施している。415は平基式で、片側の刃部が内湾し左右非対称の平面形態をなす。先端部を欠損する。416は平基式の完形品であり、基部がわずかに内湾し、左右非対称の三角形に近い平面形態を呈する。417は平基式で、先端部が欠損している。418は平基式で、先端部および両脚端部を欠損する。表面が摩滅している。419は平基式の完形品で、表面一部に自然面を残している。420は平基式の完形品で、側縁がわずかに内湾する。421は平基式の完形品で、左右対称な平面三角形を呈する。422は凹基式だが抉りは浅く、両脚端部を欠損している。423は平基式で、基部両端と先端部を欠損する。424は平基式で、先端部を欠損する。素材の周縁部に調整剥離を施して整形されている。表裏両面に研磨が施されており、局部磨製石鏃かとも思われるが、石核433に類似した面が確認され、素材に由来する可能性もある。425は細身の平基式で、基部の一部を欠損する。426も細身の平基式で、先端部を欠損する。全体的に表面が摩滅している。427は木の葉形の平面形態を呈し、基部は丸みを帯びる。428は粗い剥離によって柳葉形の平面形態に成形されているが、調整剥離は片側の側縁にのみ観察される。429は主要剥離面に二次加工を施し縦長の形状を作り出しているが調整剥離は見られないことから、未成品の可能性もある。

本遺跡出土の石鏃の多くは長二等辺三角形の平面形態を呈し、基部は直線かわずかに内湾する平基式で、抉りはほとんど施されない。

430・431は黒曜石の剥片である。430は上面から二次加工の大きな粗い剥離が施されており、バルブも観察される。調整剥離は施されていない。濁った灰色を呈する石材で、本遺跡で出土する他の黒

曜石とは質感が異なる。431はわずかに自然面を残す。主要剥離面の側縁の数か所に調整剥離が施されている。

432・433は黒曜石の石核である。432は下面に自然面を残すが、上面、側面、下面に打面が形成されていることから、2回の打面転移が行われたことがわかる。433は全面に自然面が残っている状態であるが、研磨されたことで他の自然面とは質感が異なる面が存在している。打製石鏃（424）や剥片（377）に観察される摩滅した面は、こうした石核の磨かれた表面に由来する可能性がある。打製石器の製作工程において研磨という作業が行われたとは想定し難く、石材採取地から消費地あるいは石器製作地へ運搬する過程において何らかの理由で磨かれたものと考えられる。

3. まとめ

最下層のⅪ層からは、安山岩の不定形刃器（371・372）が2点出土している。縄文系の石器であり、江辻SX-1段階までは大陸系磨製石器は出土せず、石匙や打製石斧などの縄文系石器のみが出土している（粕屋町教育委員会1998）。410の石匙も江辻SX-1段階のものであろう。

夜臼Ⅰ式段階のⅩ層からは、縄文系の打製石斧（363・368）や打製石鏃（373・374）とともに、大陸系磨製石器の石包丁（366）が出土している。この段階から、石器においても朝鮮半島南部の無文土器文化系統の石器が出現すると言うことができるであろう。

夜臼Ⅱ式段階のⅨ層からは、縄文系の石器として打製石鏃、黒曜石の剥片が出土している。また、Ⅸ層からは腰岳産の黒曜石の石核（384・385）もみられる。石核は自然面を残すもので、比較的小さな原石を規則性なく多面的に剥離して剥片を取り、打製石鏃や剥片石器（刃器）に加工するものである。石核とともに多くの剥片がⅨ層から出土しているが、本遺跡で石器加工が行われていることを示している。このような多面剥離の石核は、夜臼式から弥生時代前半期に認められる石核であり（橋1987）、十郎川技法と呼ばれるものである。十郎川技法は、古閑式新段階以降の縄文晩期から認められるものであり（梶佐古2018）、縄文系の石器として最下層の江辻SX-1段階から存在するであろう。腰岳で採集された黒曜石の小さな原石が遺跡に持ち込まれ、宇木汲田遺跡内で石器加工が行われたのである。さらに364の磨製石斧も出土しているが、これは大陸系の磨製石斧ではなく、縄文の系譜を引く磨製石斧である（下條1986）。大陸系磨製石器としては、365の磨製石鏃が出土している。銚形をなす類例の乏しい磨製石鏃である（下條1986）。

Ⅲ層からは縄文系の凹石や敲石も出土している。第9章で示されるように、Ⅹa層の貝層からイネやアワ・キビのみならず堅果類もでており、夜臼Ⅰ式時期においても縄文系の凹石や敲石が堅果類の加工のために使われていたと考えることができるであろう。この他、Ⅲ層では大陸系磨製石器の392～394の扁平片刃石斧や391の柱状片刃石斧が出土している。このような木製農具など木製品の加工具は、Ⅹ・Ⅸ層の夜臼式段階から出現していた可能性が高い。

宇木汲田遺跡が始まるⅪ層の江辻SX-1段階は、無文土器文化の影響が認められない段階であり、刃器や石匙などの縄文系石器のみが使われていた。おそらく打製石斧も併せて使われていたであろう。貝塚層が始まるⅩ層の夜臼Ⅰ式段階には、イネやアワ・キビなどの穀物農耕が朝鮮半島南部の無文土器文化から流入する段階である。この段階には石包丁などの大陸系磨製石器が出現している。夜臼単純期であるⅩ・Ⅸ層の貝塚層には、399の柳葉系磨製石鏃や扁平片刃石斧・柱状片刃石斧などの大陸系磨製石器も出現していたであろう。しかし、一方では、凹石や敲石といった堅果類の加工具あるいは打製石斧も併存しており、縄文的な堅果類の採集などの生業も引き続き行われていたことが明らか

となったと考えられる。さらに、腰岳産黒曜石の小さな原石を遺跡に持ち込み、十郎川技法による剥片獲得による打製石鏃や剥片石器の製作が遺跡内で行われていた。こうした打製石器の製作方法も、この夜臼式段階から本格的に始まり、北部九州の弥生早期・前期に広く認められる。

参考文献

- 梶佐古幸謙 2018「北部九州の縄文・弥生時代移行期における剥片石器石材の獲得・消費戦略」『九州考古学』第93号、1-21頁
- 粕屋町教育委員会 1998『江辻遺跡 第4地点』（粕屋町文化財調査報告書 第14集）
- 下條信行 1986「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開—宇木汲田貝塚一九八四年度出土石器の報告を兼ねて—」『九州文化史研究所紀要』第31号、103-140頁
- 橋昌信 1987「縄文時代晩期および弥生時代の剥片石器—宇木汲田貝塚を中心に—」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』岡崎敬先生退官記念事業会、181-203頁